

第38川崎市文化芸術振興会議（摘録）

- 1 会議名 川崎市文化芸術振興会議
- 2 日時 平成27年7月8日（水）
午前9時30分～午前10時45分
- 3 場所 かわさき宙と緑の科学館（青少年科学館）2階 学習室
- 4 出席者
 - (1) 委員 澤井委員（議長）、垣内委員（副議長）犬飼委員、小泉委員、小嶋委員、関委員、高田委員、林委員、藤嶋委員
 - (2) 事務局 市民・こども局市民文化室
中村室長、高橋担当課長、石床担当係長、渡邊職員
- 5 議題
 - (1) I n U n i t y開催事業評価について
- 6 公開・非公開の別 公開
- 7 傍聴者 0名

【審議内容】

事務局 委員過半数の出席により、会議が成立した旨を確認。

議題1

事務局 資料として、「I n U n i t y調査評価シート」と、「アセスメント報告書（叩き台）」をご用意させていただいた。調査評価シートは、フィールドワークやヒアリング、書面による調査内容を記した基礎資料として作成したものであり、審議の参考にしていただきたい。報告書については、それらの内容や、フィールドワーク、ヒアリングでの各委員の意見を元に作成したものであり、市長に報告する内容の素案である。ただし、あくまで叩き台であるため、記載している内容に捉われず、自由に審議いただき、その内容を反映させていただければと考えている。

内容についてであるが、公演の進行や演出、盛り上がり、様々な世代の参加など、当日の公演自体は非常に高評価をいただいたと考えている。また、運営も市民中心の実行委員会が企画等まで担っており、事業において大きな役割を果たしている。

しかし一方で、実行委員会の体制の強化などが必要との意見も強くいただいております、そうした視点を入れ込んだ形で報告書の叩き台をご用意させていただいた。

- 澤井議長 出演団体については例年固定されているということはないのか。
- 事務局 毎回、多くの初参加グループが参加している。数年間続けて出ているグループもあるが、固定されているものではない。
- 高田委員 事業そのものを見たところ、盛り上がっているし悪くない事業かと思う。一方で、16年継続している事業について大いに違和感を持っている。委託事業とはいえ、自立していくという感覚をもって臨んでもらいたいとの思いを強くする。
- 澤井議長 事業目的として新旧住民や世代間の交流をうたっているものであり、地域の演芸会として開催されているわけではない。目的から逸れない限り、継続して実施していくことにも一定の意義はあるのではないかと。
- 高田委員 川崎市の人口の流入状況を見ると、そうした課題があることはわかる。しかし、一方で、その課題を解決する事業がなぜこれなのか、この事業でないといけないのかという思いがある。
- 林委員 市内では様々な活動がなされているし、新しい動きも起きている。そうした中で、固定化するというのは、言い換えれば他の可能性を潰しているということにもなるのではないかと。もっと、良い事ができるかもしれない。
- 犬飼委員 固定化ということはあるかもしれないが、出演者が固定化したり、特定の誰かのための事業になっているわけではない。若い世代を含め、様々な世代の来場者も楽しんでいるし、良い事業であると評価したい。
- 高田委員 この事業が、総合的に見てうまくいっている事業ということは、関係者の誰もが認めるところであろう。ところが、16年間もの長きに亘り継続できた、こうした事業が行政の支援が途切れたらどうなるか。企画そのものの意義は、行政からの財政支援に左右されるものではない。資金の工面が出来ないから、そこで終わってしまうということなく、実行委員会は、既に長い猶予期間を与えられて来ているので、我々が作っているのだという意識を持ち、行政の200万円など当てにせずやっていくという意識を強く持って欲しい。
- 犬飼委員 そうはいつでも、いきなりの自立など、事実上不可能ではないか。入場料などをとってやっていける事業でもない。寄附金など自立できる環境を整えてからでないとなりゆかない。
- 林委員 段階的に自立を図っていく必要がある。完全な自立は無理としても、徐々に委託料から自主財源にシフトしていくことによって、自分たちの経営能力もついてくる。
- 関委員 実行委員会といっても、固定の団体があるわけではなく、実質的に区の地域振興課が大きな役割を担っているように見えた。いわゆる広場づくりの事業だが、母体となる団体が無い状態で自立といっても厳しいのではないかと。
- 事務局 事業自体は、地域課題に対する提案事業として行政が仕掛けたのが始まりであり、地域のミュージシャンやダンスチームなどとともに立ち上げた経緯がある。事業に

おける行政の役割は、主にサポートであり、金銭面はもちろんだが、会場の手配や折衝などは行政が行っている。事業の実施は、実行委員会・ボランティア・行政の三者が協力しながら行っており、企画については、実行委員会が中心になってアイデアを出し合って進めている。実行委員会のメンバーについては、当初から関わっている方もいれば入れ替わりもあり、固定化されたメンバーでずっと行っているわけではない。

小泉委員 この事業は、補助ではなく発注している委託事業。行政が、特定の団体のために行っているものではなく、世代間交流や担い手を作っていくという行政目的をもって実施しているのであれば、継続していくことは問題ないとする。ただし、その目的がぶれずに行われているかの検証は重要。楽しい盛り上がる事業だったということでは終わらせてはいけない。

藤嶋委員 こうした事業が金銭面で自立できるかという点、おそらくできないし、こうした事業目的を達成するには継続していくことが重要。ただし継続していく中で、目的を達成しているかのチェックが必要。

林委員 文化活動については、無料だから来る、有料だから来ないという考え方が非常に多い。しかし、人が来るから無料という考え方が良いのかという点で疑問が残る。有料にした場合に、何が起こるかという点で、来場者は「クライアント」になり、質に対して非常に厳しい目線で見えてくる。そうした目線が芸術活動の質を向上させることに繋がっていく。少しお金をとってでも来てもらえるよう努力するということは芸術文化の質の向上に繋がる。行政の事業が長期的に収縮せざるを得ない中で、文化芸術は体力をつけていく必要がある。

澤井議長 ただ、この事業については、手段としては文化芸術活動を使っているが、質の向上を目指して行っている事業ではない。

関委員 資料のフィナーレの写真を見ていただくとわかるが、これだけ多くの出演者が出ている。こうした出演者同士の交流をどれだけ図れているのか。事業目的からしても、このあたりを工夫していく必要がある。

小嶋委員 どちらの意見も、本当にそのとおりでと思って聞かせていただいた。一方で、予算を見ると、ほとんどが会場費と機材費であり、労力はほぼボランティアでまかなっている。非常に少ないお金でやっており、この百数十万円はぎりぎりまで切り詰めた数字と思われる。芸術大学でもチケットを売ると人が来ない中で、この費用を賄うのは非常に厳しいと感じる。

もう一つ、行政目的として地域交流を挙げているが、どれぐらいの成果が出ているのか。効果検証はされているのか。

事務局 地域交流がどの程度進んだか、なかなか目に見える指標がなく検証は難しいが、応募者が徐々に増えているなど、広がりが出ていると思われる。また、実行委員会の出身者が、アマチュアバンドを支援していくような団体を作り、市内全域の音楽活動をサポートしたりしている。そうした面での波及効果という部分はある。

垣内委員 先にも出たが委託事業でもあり、事業実施にあたっては、事業目的についての成果の振り返りが必要である。前回のヒアリングでは、そうした面への質問に対する回答が非常に弱かったので、こうした議論になっているが、今の話や、応募団体が増えてきているということは、一定程度の効果はあるのではないかと思われ、継続していく意義もあるように思う。一方で、全く同じように続けていくことが良いわけではなく、自立は困難としても、新たな魅力を産み出すための費用ぐらひは自分たちで稼いでいくような「自走化」に向けた取り組みが必要なのではないか。

提言にも、金銭的な自立に向けた部分が記載されているが、例として出されているパンフレットへ掲載による広告料などは、ちょっと古いし、手間もかかる。今は、クラウドファンディングのようにICTを活用した支援など多様なものが生まれているのでこの部分の例示は考えたほうがよいように思う。

林委員 実際に見に行った際の印象で、観客席のうち、出演者が占める割合というものが非常に多かったように感じたのだが、どのような方が来ているのかといったアンケートはあるのか。

事務局 イベントを何で知ったかというアンケートを行っており、出演者が知り合いという方が6割である。残りの4割…。アンケートには出演者自身は入っていないと思われるのでもう少し低いかとは思いますが、それでも観客席の3割程度の方は、身内を見に来たのではなく、舞台を楽しみに来たと推測される。

高田委員 インキュベーターとしての役割を実行委員会が果たしたということは非常に面白いし、いい効果だと思し、大事な話であると受けとめた。

澤井議長 そういう面も評価に反映させてもよいかと思う。他に意見が無いようであれば、このあたりで「In Unity開催事業」についての審議を終えたい。

(議事終了)